令和４年度久留米市障害者地域生活支援協議会

第１回地域包括ケアシステム検討部会　議事録

次　　第	１　開会 ２　委嘱状交付 ３　説明 （１）所属団体等における「精神障害者が地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができる」取組み ４　協議事項 （１）久留米市における精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム構築に向けた推進事業について ５　その他 ６　閉会
開催日時	令和４年８月２日（火）１８：３０～１９：３０
開催場所	ＺｏｏｍによるＷｅｂ会議
出　席　者 （敬称略）	・久留米精神障害者地域家族会　・くるめ出逢いの会 ・日本ピアスタッフ協会 ・久留米市介護児福祉サービス事業者協議会（訪問看護部会） ・久留米市介護児福祉サービス事業者協議会（障害者部会） ・福岡県精神科病院協会　・久留米市障害者地域生活支援協議会 相談分科会 ・久留米市障害者基幹相談支援センター
欠　席　者 （敬称略）	・福岡県精神保健福祉士協会　・福岡県精神科病院協会
内　　容	１．開会 １０名中、８名参加のため会議成立 ２．委嘱状交付 １名追加。任期は令和４年７月１日から令和５年３月３１日まで ＜会長＞ 傍聴希望者の確認 ＜事務局＞ 傍聴希望者はなし ３．説明 （１）所属団体等における「精神障害者が地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができる」取組み

	＜事務局＞資料１、参考資料１を用いて説明 ・国がイメージする精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築に向けて必要なこととして２点あり、１つは医療、福祉、住まい、地域の助け合い、普及啓発などが包括的に確保されたものであること、２つめは関係者による協議の場を通じて、医療機関、当事者、家族などとの重層的な連携を図る必要があるということ。 ・Ｐ１～４には、各委員の所属団体において、「精神障害者が地域の一員として安心して自分らしい暮らしをすることができる取組み」を列記している。 ・それら取組みを、Ｐ５～９において、国の構築推進事業として示す１３事業に分類した。国の示す推進事業の大部分は、各委員の所属団体での取組みによって対応できている。 **４．協議事項** （１）久留米市における精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム構築に向けた推進事業について ＜部会長＞ ・Ｐ５～９で分類された各委員の取組みについて、重複はないということでいいか。 ＜事務局＞ ・そのとおりである。 ＜部会長＞ ・活発に協議するために、あらためて各委員より各自の取組みについて説明してほしい。 ＜委員＞ ・精神障害者地域家族会が共同作業所を立ち上げた経緯もあり、家族会と共同作業所での取組みを書かせてもらっている。家族会や共同作業所の活動は、極力地域の方と一緒に行うようにしている。 ＜部会長＞ ・施設での活動は年間を通して行われているのか、期間限定なのか。 ＜委員＞ ・市文化財保護課やまち旅事務局と協力して年間を通して行い、施設を訪れる方に精神障害者の働く場として周知している。 ＜委員＞ ・自分たちの活動は支援ということでなく待ちの姿勢であり、共に学ぶともに成長するというスタンスで関わっている。よって、評価は来所数などの数値よりも、来所した人の変化を重視している。 ・活動期間が５年ほど経ち、最近になってようやく来所している人が変化している、または、自分の足で自分の人生を歩んでいるという実感を持つようになった。来所する人の主体を大切にしながら、インフォーマルな関係を築き一緒に活動している。 ＜部会長＞ ・委員の事業所は、みんなが行けるときに訪れ、たわいのないことを言いながら、悩み

	や今後のことなどを共有するという場ですね。 ＜委員＞ ・この頃は、来所した人たちが自然に集まり、近況を話し合うことができている。その内容を紙に記したらかなりの量になった。それらは彼らにとっての知恵となっている。また、そのような居心地の良さや安心を得られる中で、自分を見つけていく場になっていると思う。支援することを我慢し、我慢することで様々なことが起きてくるようになっている。 ＜部会長＞ ・そのような場所は、精神障害者が病院から退院したときに安心する場所になり、必要な場所になる。このような場所が久留米市に広がっていけばいいと思う。 ＜委員＞ ・当協会は、日本全国でピアスタッフの普及啓発を行っている。また、運営している会社においては、今年度県の委託を受けピアサポーター養成を実施予定。 ・各団体が行っている事業を国が推進する事業に当てはめれば、資料のとおり当てはめることができると思う。しかし、このことが包括ケアシステムであるということにはならないのではないか。包括的と言うのであれば、それぞれの機関や支援者、行政も含め、お互いが顔見知りになること、意見交換しやすいことが重要だと考える。 ・相談支援事業所による相談ネットのように、精神障害者を支援する事業所や医療機関など、様々な方々が顔見知りになれるような仕掛けが必要であると思う。どのようにしたらその仕掛けを作ることができるのかということを考えていた。 ・機関どうしの横のつながりがないばかりに、その機関での知恵が広がらない、知恵がその機関だけに留まっている状況になっている。 ＜部会長＞ ・確かに相談支援事業所の集まりや訪問看護事業所の部会、病院どうしの集まりなど、それぞれの集まりはあると思うが、それらが一体的にはなっていない。その仕組みや仕掛けがないと思う。 ＜委員＞ ・利用者の状況を把握し、利用者に対し安心して話す場がここにあるということを示すようにしている。 ・利用者から理解してもらえないということをよく聞くが、一緒に住む家族や周囲の方に理解してもらえるように活動し、家族を含めたケアが地域にあることを望んでいる。 ・年を重ねると教えられることに対し壁をつくるようになるので、気軽に相談できる場をつくるように心掛けている。 ＜部会長＞ ・委員は利用者に対し直接支援する立場であるため、利用者と距離が近い。その関係から出てくることを、どのように地域に繋げていくかという視点で、この部会に対し意見を言ってもらいたい。

	＜委員＞ ・現在、福岡県内の数ヶ所で障害者雇用を行っている。最近は精神疾患の方の採用が増えてきた。期限を決めて行う作業を増やし、最終的には自立していただくようになってきた。 ・雇用している方で事情により家庭で１人になる状況が発生し、そのためヘルパーとして入るようにした。ヘルパーとして介入し安心感を与え、さらに会社で働いてもらうことで、自立していってもらえたらと考えている。 ＜委員＞ ・当院では救急の方を受入れ、ほとんどの方が３ヶ月以内で退院していく。もともとは長期入院の方ばかりで、その方たちが地域で生活してもらえるように様々な取り組みをしていた。入院期間は３ヶ月だが、入院中から外来により生活できるよう様々なプログラムを行っている。 ・職員もサポートをするが、当事者自身が活躍できる場、発信できる場を提供している。どうしても病院なので治療的な取り組みが多くなっている。 ＜部会長＞ ・長期入院している方にとって、地域にでる怖さはあると思う。これらを地域でどのように支えていくのか考えていく必要がある。また、さきほど別の委員から提言のあった仕組みを構築することで、このことを考えていければいいと思う。 ＜委員＞ ・精神障害者への支援として、ハード面では作業所や訪問看護、ヘルパー、就労系事業所など昔に比べたらかなり充実してきたと感じる。しかし、ソフト面は改善する余地がある。 ・ソフト面については、介入や対応の仕方、生活者または患者としてみるのかなど、これらについて、委員の言われるように様々な立場から意見を出し、改善をしていく必要がある。 ・精神障害者への理解については、家族どうしで、または家族会などで話し合いが行われたらいいのではないか。 ・ピアスタッフについては、ずっと一緒にいればピアでもなんでもない。つまり、長い間一緒にいれば、ピアや当事者などそのような立場、関係性は気にならなくなる。 ＜部会長＞ ・最後に、私の団体での活動を言うと、当団体では障害のある方が職員として活動してきた団体である。また、退院支援をしている中で不動産分野では壁があり、不動産関係への啓発なども含めて、市の居住支援協議会に携わっている。 ・私からの提案として、まず委員から言われた仕組みづくりがあると思う。また、委員の言われたソフトの繋がりのなさ、これがないため上手く進まないと考えられる。 ・専門職だけで考えてもうまくいかない。そこには当事者の力をしっかりと生かしたい、また生かすべきと考えている。 ＜部会長＞

	・各委員から提案はないか。 ＜委員＞ ・今ほど社会資源が充実していない１０数年前に、久留米では医療や福祉など様々な事業所が繋がって行ったフォーラムがある。そのものズバリを行うことは無理だが、一緒に講演会などを行うことで支援者や当事者が顔見知りになるということを行ってはどうか。 ＜委員＞ ・最近ＧＨへ見学しに行ったとき農業を行っていた。そこでは病院とは違った姿を見ることができた。そのような当事者の方から、この部会で意見を聞くことができたらいいのではないか。この意見がヒントになるのではないか。 ＜部会長＞ ・以前は地域に支援を行う、人のいい方がいた。２４時間の支援というのは、専門職の支援では限界があるので、地域の方を巻き込む仕掛けづくりが必要だと思う。 ＜委員＞ ・利用者が頑張っている姿を家族や地域の方に極力見せるようにし、家族や地域の方に対し理解を広めるように努めている。 ＜委員＞ ・現在、他市の事業所に通っており、他市では基幹とのつながりはあるが、事業者どうしの繋がりは薄い。他市と比べると、久留米市では事業者どうしの繋がりはあるように感じる。 ＜委員＞ ・子どもへの支援を行うこともあり、子どもに対する支援は様々な機関と繋がる必要があるため、今回の協議内容と重なるところがあると感じていた。 ＜委員＞ ・家族がデイサービス等を利用することに対し、ハードルが高いと感じていることがある。よって、家族とサービスを繋げることを補完する組織があればいいと思う。 ＜委員＞ ・繋がりは周りが決めること、または決めつけることではないと思う。利用者は自ら繋がりを持ちたいと思い、繋がっていくものであると考える。 ・利用者本人に選択に対する責任を持たせることが重要であり、やる・やらされるという関係はいけない。 ・本人のリカバリーの力を信じ、また失敗したときには手を差し伸べられるようにし、一緒に立ち上がれるような関係性を築きたい。 ＜部会長＞ ・今回、各委員より様々なキーワードが出たと思う。繋がりを持つための仕掛けづくり、本人が自覚し変わっていく力を信じること、本人が出来ることや強みを病院側から提供してもらうこと、さらには利用者が地域に出たとき安心を感じられるようにすること、この安心感を与えられる仕掛けづくりをしていかなければならないことなど様々

	なことを言われた。これらを検討していかなければならないと考える。 ＜事務局＞ ・本日いただいた意見には、異業種の機関とはつながりが薄い部分があり、その部分を何かの仕掛けにより太くすること、また当事者本人がリカバリーしていくことを前提にした何らかの仕組みをつくることなどがあった。その他にも様々な意見があったと思うが、ポイントを整理し、次回協議を行いたい。 ５．その他 ６．閉会

以上